<シンポジウム (2)-7-2>脳出血-最新の内科的アプローチ

脳出血内科治療の最新知見:予防、治療としての血圧管理

古賀 政利1) 豊田 一則2)

(臨床神経 2012;52:1110-1112)

Kev words: 脳出血、高血圧、予防、降圧療法、ニカルジピン

はじめに

わが国の脳出血発症頻度は約50~100人/10万人・年で、脳出血は全脳卒中の17~30%を占める.日本や中国など黄色人種での脳卒中発症頻度は、白人やヒスパニック、黒人の2倍程度である¹⁾. 脳出血は死因となるばかりでなく要介護性疾患としても重要である¹⁾. 脳出血の約8割が高血圧性であり、血圧管理により発症を予防することが可能である.また、急性期の血圧管理により血腫拡大の抑制が期待できる.ここでは、最新の知見を踏まえて脳出血の予防および治療としての血圧管理を解説する.

予防としての血圧管理

高血圧は脳血管障害の最大の危険因子であり、そのコント ロールにより脳出血をふくむ脳血管障害の発症が3~4割減 少することが示されている. 高血圧治療ガイドライン 2009 では、降圧目標を若年者・中年者で 130/85mmHg 未満、高齢 者で 140/90mmHg 未満, 糖尿病や慢性腎臓病合併例, 心筋梗 塞既往例 (ハイリスク例) で 130/80mmHg 未満, 脳血管障害 (2次予防) で140/90mmHg 未満, 脳出血で140/90mmHg よりさらに低い値を推奨している(Table 1). Perindopril Protection Against Recurrent Stroke Study (PROGRESS)2)では 降圧療法で脳卒中の再発が28%減少した.この試験では、脳 出血は50%減少し、脳出血既往例では再発が49%減少し た2. 達成収縮期血圧別に検討すると脳出血の発症頻度は収縮 期血圧が低いほど少なくなり、112/72mmHg(中央値)で最 低であった3. 拡張期血圧が90mmHgを超えると脳出血の再 発が多いことが日本人のデータで示されており、脳卒中治療 ガイドライン 2009 では拡張期血圧を 75~90mmHg 以下に コントロールするよう勧めている.一方で、どの程度まで降圧 すべきか十分なデータがなく、脳出血をふくめた脳血管障害 既往患者5,000例を目標にRecurrent Stroke Prevention Clinical Outcome Study (RESPECT) 研究で標準治療 (140/ 90mmHg 未満もしくはハイリスク例で 130/80mmHg 未満) と厳格治療(120/80mmHg 未満)の比較が進行中である.

脳出血予防で血圧とともに注意を要するのは使用機会が増 えてきた抗血栓薬の使い方である. Bleeding with Antithrombotic Therapy (BAT) Study (主任研究者:国立循環器病研 究センター 峰松一夫)450では脳血管障害や心臓病の再発予 防のために抗血栓薬を内服している 4,009 例が前向きに登録 し、19カ月にわたって出血イベントを調査した。主要評価項 目である重篤・重症出血は、抗血小板薬単剤で1.2%、抗血小 板剤 2 剤以上併用で 2.0%, ワルファリンで 2.1%, ワルファリ ンと抗血小板薬の併用で3.6%に発生した. 脳出血は各々 0.3%, 0.6%, 0.6%, 1.0% に発生した. 脳出血の発症は、とく に脳血管障害既往患者でこの傾向がみられた. 血圧推移の検 討では、頭蓋内出血を発症した患者のみ発症直近外来時の血 圧は上昇し、頭蓋外出血や出血がなかった患者では血圧の上 昇をみとめなかった. 抗血栓薬を内服しているばあいには. 発 症直近時の血圧値が低いほど脳出血の発症率は低く, 130/81 mmHg 程度未満に降圧するのが妥当であることが示された. BAT の結果から、脳血管障害の既往があれば抗血栓薬の併用 は極力避けるべきである.薬剤溶出性ステントの使用で抗血 小板薬の併用が必要な時は、より厳格に血圧を管理する必要 がある. 最近の PROGRESS の出血性イベントに関するサブ 解析®で、降圧療法は頭蓋内出血を抑制していたが、頭蓋外出 血は抑制していないことが示された。頭蓋内出血は抗血栓薬 内服の有無にかかわらず抑制されていた.

脳出血急性期の血圧管理

脳出血を発症した急性期の血圧管理に関する十分なエビデ

Table 1 降圧目標.

	診察室血圧		
若年者・中年者	≤130/85mmHg		
高齢者	≤140/90mmHg		
糖尿病患者 CKD 患者 心筋梗塞後患者	≤130/80mmHg		
脳血管障害患者	≤140/90mmHg		
脳出血やラクナ梗塞	≦140/90mmHg よりさらに低い		

高血圧治療ガイドライン 2009 から引用改変

(受付日: 2012年5月24日)

[□]国立循環器病研究センター脳卒中集中治療科〔〒565-8565 大阪府吹田市藤白台 5-7-1〕

²⁾同 脳血管内科

	%	(95% CI)	200 例での予測値: 90%CI
主要評価項目			
降圧開始から72時間以内の神経症状進行(NIHSS≥4増加 or GCS≥2低下)	8.1%	$(5.1 \sim 12.5)$	$15.1 \sim 26.0\%$
24 時間以内のニカルジピン中断を要する重篤な有害事象	0.9%	$(0.3 \sim 3.4)$	$1.7 \sim 8.9\%$
24 時間後 CT 上の 33% を超える血腫拡大	17.1%	$(12.6 \sim 22.7)$	$17.0 \sim 28.4\%$
3カ月後の転帰不良(modified Rankin Scale 4~6)	41.2%	$(34.8 \sim 48.0)$	$54.4 \sim 68.1\%$
3カ月後の死亡	1.9%	$(0.7 \sim 4.8)$	$5.9 \sim 13.6\%$

Table 2急性期脳出血に対するニカルジピン静注による収縮期血圧 160mmHg 以下への降圧療法: SAMURAI-ICH 研究の結果.

ンスはないが、米国脳卒中協会のガイドラインに準じて, SBP>180mmHg または平均血圧>130mmHg のいずれかの 状態が続いたら降圧治療を開始する. この発症時によく観察 される著明な血圧高値は、その後の血腫増大や再出血などの 原因と考えられ、転帰不良と強くかかわっている. 一方で、降 圧により血腫周囲の循環障害が惹起され転帰が不良となる可 能性も示唆されている. われわれは、わが国における急性期脳 出血の血圧管理の現状を調査し、脳出血急性期にはニカルジ ピン静注による SBP160mmHg 以下への降圧が一般的である ことを明らかにした7. さらに、この治療法の安全性を確認す るための多施設共同前向き研究 (SAMURAI-ICH 研究) をお こなった. 211 例を登録し安全性を評価する主要および副次 評価項目は、いずれも過去の報告から算出された発生頻度の 90% 信頼区間の下限域以下もしくは区間内であり、この降圧 療法が安全であることがわかった(Table 2). ニカルジピン静 注薬は頭蓋内出血で止血が完成していないと推定される患者 や、脳卒中急性期で頭蓋内圧が亢進している患者には投与禁 忌であったが、われわれの研究により臨床現場との乖離が明 らかとなった。2009年に日本脳卒中学会、日本脳神経外科学 会、日本高血圧学会が添付文書の改訂を要望していたが、2011 年6月にこれらの項目は慎重投与項目となり、投与する時に は「緊急対応が可能な医療施設において、最新の関連ガイドラ インを参照しつつ、血圧などの患者の状態を十分にモニタリ ングしながら投与すること」が警告として加わった.

第 Ⅲ 相国際多施設共同試験

Intensive Blood Pressure Reduction in Acute Cerebral Haemorrhage Trial (INTERACT)⁸⁾と Antihypertensive Treatment of Acute Cerebral Hemorrhage (ATACH)⁹⁾により急性期脳出血に対する SBP140mmHg 未満への降圧の安全性が示された. 現在, INTERACT2 と ATACH II(ClinicalTrials.gov no. NCT01176565; UMIN 000006526)¹⁰⁾でガイドラインに準じた降圧 (SBP180mmHg 未満) とより積極的な降圧 (SBP140mmHg 未満) の比較が進行中である. 本年3月1日に ATACH II にわれわれの施設から第1例目を登録し,最終的に日本から17施設が参加する.

おわりに

もっとも治療効果が期待できる脳出血の急性期には、そのターゲットとして降圧による血腫拡大や症状増悪の抑制が挙げられる。今後、現在進行中である INTERACT2 や ATACH II の結果による急性期血圧管理法の確立を期待したい。

※本論文に関連し、開示すべき COI 状態にある企業、組織、団体はいずれも有りません。

文 献

- van Asch CJ, Luitse MJ, Rinkel GJ, et al. Incidence, case fatality, and functional outcome of intracerebral haemorrhage over time, according to age, sex, and ethnic origin: a systematic review and meta-analysis. Lancet Neurol 2010;9:167.
- Randomised trial of a perindopril-based blood-pressurelowering regimen among 6,105 individuals with previous stroke or transient ischaemic attack. Lancet 2001;358: 1033.
- Arima H, Chalmers J, Woodward M, et al. Lower target blood pressures are safe and effective for the prevention of recurrent stroke: the PROGRESS trial. J Hypertens 2006;24:1201.
- 4) Toyoda K, Yasaka M, Iwade K, et al. Dual antithrombotic therapy increases severe bleeding events in patients with stroke and cardiovascular disease: a prospective, multicenter, observational study. Stroke 2008;39:1740.
- Toyoda K, Yasaka M, Uchiyama S, et al. Blood pressure levels and bleeding events during antithrombotic therapy: the Bleeding with Antithrombotic Therapy (BAT) Study. Stroke 2010:41:1440.
- 6) Arima H, Anderson C, Omae T, et al. Effects of Blood Pressure Lowering on Intracranial and Extracranial Bleeding in Patients on Antithrombotic Therapy: The PROGRESS Trial. Stroke 2012:43:1675.
- 7) Koga M, Toyoda K, Naganuma M, et al. Nationwide survey of antihypertensive treatment for acute intracere-

- bral hemorrhage in Japan. Hypertens Res 2009;32:759.
- Anderson CS, Huang Y, Wang JG, et al. Intensive blood pressure reduction in acute cerebral haemorrhage trial (INTERACT): a randomised pilot trial. Lancet Neurol 2008;7:391.
- 9) Antihypertensive Treatment of Acute Cerebral Hemorrhage (ATACH) investigators. Antihypertensive treat-
- ment of acute cerebral hemorrhage. Crit Care Med 2010; 38:637.
- 10) 佐藤祥一郎, 山本晴子, Qureshi AI ら. わが国における Antihypertensive Treatment of Acute Cerebral Hemorrhage (ATACH)-II 試験の開始:デザインと国内研究体制の構築. 臨床神経学 2012, 印刷中.

Abstract

Medical therapy for intracranial hemorrhage: Update Blood pressure management for prevention and acute treatment

Masatoshi Koga¹⁾ and Kazunori Toyoda²⁾

¹⁾Division of Stroke Cave Unit, National Cerebral and Cardiovascular Center

²⁾Department of Cerebrovascular Medicine, National Cerebral and Cardiovascular Center

Intracerebral hemorrhage (ICH) is a common stroke subtype in Japan. Hypertension is the leading cause. Perindopril Protection Against Recurrent Stroke Study (PROGRESS) revealed that blood pressure (BP) lowering could reduce stroke recurrence by 28% (ICH recurrence by 49%). The guideline for the management of hypertension (JSH2009) recommends BP control of $\leq 140/90$ mmHg for patients with prior stroke. BP is frequently elevated in acute ICH, although BP management strategy is controversial. The guideline from the American Stroke Association suggests if systolic BP (SBP) >180 mmHg and there is no evidence of elevated intracranial pressure, then consider a modest reduction of BP. A nationwide survey revealed that SBP lowering to ≤ 160 mmHg using intravenous nicardipine in acute ICH is a major strategy in Japan, and the safety was confirmed by a multicenter, prospective, observational study. Intensive Blood Pressure Reduction in Acute Cerebral Haemorrhage Trial (INTERACT) and Antihypertensive Treatment of Acute Cerebral Hemorrhage (ATACH) showed the feasibility and safety of early rapid BP lowering to 140 mmHg. INTERACT2 and ATACH II are the randomized trials to compare the guideline-based control (≤ 180 mmHg) and strict control (≤ 140 mmHg). We have just started to enroll patients to ATACH II from Japan on February 2012.

(Clin Neurol 2012;52:1110-1112)

Key words: intracerebral hemorrhage, hypertension, prevention, blood pressure lowering, nicardipine